

# 偕行社のあり方を思う

松島 悠佐 陸自61

10月12日の偕行社総会に参加して山崎陸上幕僚長から陸上自衛隊の大改革や将来の施策などの話を聞いた。そのご苦労は身にしみてわかった。

15万の勢力でミサイルの脅威や南西諸島の防衛・地域の安全に目一杯努力している姿はわかったが、果たしてそんなに器用に対応できるのだろうかという疑問を持った。

偕行社の諸兄は色々な立場の方がおられるが、部隊を指揮し、動かしたところのある人たちならわかるはずだが、部隊はそれほど器用には動けない。現役は与えられた任務を出来ないとは言えないので、何とか工夫して任務を全うしようとする。それが器用貧乏とも言えるような運用を生んでしまうのではないだろうか。

昔になるが、防衛部長を拝命していた時に瀬島龍三先生からご指導をいただいたことがある。瀬島先生曰く「先日本海道で第7師団を見学した隊員の充足が低く、有事になったら他の師団から戦車兵を充足して戦うという。有事にそんなことは出来ないよ。今あ

る体制で目いっぱい戦うしかないのではないか」というものだった。

私は有事充足を前提とした「画一師団」の編成を改め、15万の現員で「地域別任務別師団」の編成で戦う体制への改編を模索した。

最近でも北朝鮮のミサイル発射に合わせて数少ないベトリオット部隊を市ヶ谷や東北や沖縄に配備していたが、戦時になったら出来ないのではないかと危惧する。

偕行社の役目は現役が言えないこと、すなわち「出来ないことは出来ない」と訴えていくことではないだろうか。

多かれ少なかれ部隊を動かした経験の持ち主である我々にしか言えないことである。観念論で物言う人が多い中で、実体論で意見を言う偕行社のあり方とはまさしくそのようなものではないだろうか。

防衛努力にはバロメーターがある。私見だが、一緒に防衛問題を検討している仲間内では1%・2%・10%という数字が出てく

る。防衛に関わる人は人口の1%（警察・海保・自衛隊の総計で120〜130万人）、資金はGNPの2%（約10兆円）、その他、国民の関心、時間・空間などの努力志向（たとえば国会審議や報道など）10%程度というものである。

現役の心意気は多とするが「出来ないことは出来ない」といい続け、防衛のパロメーターが達成できるように活動してやるのが、「偕行社のあり方」だと思ふ。先輩後輩の顔を懐かしく見ながら、そのようなことを思った。

（第二頁六十七號）



明治二十一年七月第一號



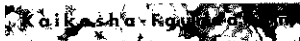
第一號

元幹部自衛官と旧陸軍将校の会

公益財団法人



偕行社



公益財団法人

偕行社

元幹部自衛官と旧陸軍将校の会

ご案内